

英雄王で異世界へ

ギルガメッシュ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

異世界シルヴァリオ。魔王により危機に陥った、ミーティア王国は、古代より伝わる勇者召喚を行う。しかし、呼び出されたのは勇者ではなく、最古の英雄王であった。

「ふはははは！ この我（オレ）を呼ぶとは、運を使い果たしたな雑種！」

なお、英雄王の中身は勇者でも、英雄王でもない模様。

# 目次

プロローグ	
英雄王で異世界へ	1
英雄の王	4
第一章 辺境都市エデン編	
英雄王、街を目指す	8
英雄王、街に着く	13
英雄王、冒険者になる	18
英雄王、騒動に巻き込まれる	23
英雄王、服を買う	27
英雄王の力	31
イブの心	35
第二章 ポラリス帝国編	
騒動の予感	40
第一皇女	46

## プロローグ 英雄王で異世界へ

異世界、シルヴァリオでは、魔王による人類滅亡の危機に瀕していた。

シルヴァリオでは遙か昔、世界に災厄が降りかかった時異世界より召喚されし勇者が世界を救ったという伝承が今も残されている。ミーティア王国では、今、世界の命運をかけた、召喚魔法が行われていた。

「という訳で、お主には、シルヴァリオへ行って世界を救ってもらおう。拒否権はない。」

いきなり、目の前が光つたと思つたら、この背景まで真つ白な手抜き感が、半端ない場所にいた。混乱していると、目の前の髭の生やした、これぞ神という感じの老人が世界を救え、拒否権はないと言ってきた。

「お主を選んだのは、異世界からの召喚に耐えられるものから適当に選んだから深い意味はない。これまでも、何人かに声をかけたが、すべて断られてな。また断られるのも面倒なので、さっきも言ったが、お主に拒否権はない。」

「とはいえ、一般人のお主を異世界に送ったとしても、とても世界など救えない。ということ、お主らが好きなチートの時間じゃ。一つ言え」

待ってくれ。何が何だか分からないし、そもそも、声が出ないんだが。

「わしは、心の声が聞こえる。声を出す必要はない。そんなことより、早く言え。言わんのなら勝手に決めるぞ。」

いやいやいや。異世界に行くなんて言つてないし。

「拒否権はない。10数える。それを過ぎたら、そうじゃな、ラッキーマンの力とか、どうじゃ?」

力をもらつても、戦うとか、生き物殺すとか絶対無理ですから。痛

いの嫌いだし。他の人にしてくださいよ。

「10」  
ラツキーマンの力って、異世界に幸運の星無いから意味ないじゃないですか。

「9」  
不味い、この人本気だ。とりあえず、まずは何の力をもらうか考えよう。ラツキーマンの力は絶対だめだ。

「8」  
強いのは大前提、直接戦うのは無理、自力で帰れる可能性のある能力。

「7」  
そうだあのキャラの力なら。でも使いこなせるか。俺に。

「6」  
しかも、俺に殺せるのか生き物を。でもこれ以上思い付かない。

「5」  
力をくれじや、力しかももらえない。

「4」  
力を使いこなせるようにしてくれだと、肝心の力がもらえない。

「3」  
力をもらって、その力を使いこなす。

「2」  
そうだ。これなら、力をもらい、使いこなし、生き物を殺せるようになるかもしれない。

「1」  
俺をギルガメツシュにしてくれ。

「0、では、お主をギルガメツシュにして、異世界に送ろう」  
そうして、俺は光に包まれた。



ミーティア王国のアリシア聖堂、その最奥アリシア像の前に一人の少女が手を胸の前に組み祈っていた。

すると少女を中心に光を放つ魔法陣が浮かび上がった。魔法陣は

徐々に光を強めひと際強く光る。少女はたまらず目を閉じ、しばらくして目を開けると、そこに魔法陣はなく、一人の男が立っていた。

「ふははははー！ この我を呼ぶとは、運を使い果たしたな雑種！」

少女はこう思った。呼ぶ人を間違えた。

## 英雄の王

俺が、目を開けるとそこには一人の少女がまるで何かに祈るように目を瞑り、跪いていた。彼女が目を開けてこちらを認識したようなので、彼女に声をかけようとしたが、俺の口から出た言葉は俺の言おうとした言葉とまるで違かった。

「ふははははー… この我を呼ぶとは、運を使い果たしたな雑種！」

それは、どこかで聞いた声と、セリフだった。俺が事態を呑み込めないまましていると。少女はまるで、最後の希望を失ったような、自らの無力に泣きそうな顔をした。俺は、未だに状況を把握できないが、まだ幼い少女にこんな顔をさせたくないと思った。だから、何とか慰めようとしたが、

「ほう、この我を前にして、失望するなど、万死に値するが、興が乗った。事情を話せ、雑種。」

これである。俺は、頭を抱えなくなったが何とか抑え、少女を見た。少女は先ほどとは打って変わって、覚悟を決めたような顔をして、俺を見た。

「私の名前は、イブと申します。魔王による世界の危機を救うため、勇者召喚の儀式を行い、貴方をこの世界に呼びました。どうか、魔王を倒してはくれませんか勇者様。」

少女の話を聞いて、ようやく、あの老人との会話を思い出すことが出来た。この声や口調は恐らく、望んだチートのせいだろう。ようやく事態を把握した。そして、少女の問いに対する答えは勿論

「断る。」

少女は俺の回答に、一瞬絶望の表情を浮かべたが、すぐに理由を聞いてきた。

「何故でしょうか。理由をお聞かせください。」

「貴様こそ何故だ。その足、我が気付かぬとも思うたか。」

「何の話でしょうか。それよりも、理由を「貴様、一体いつまで跪いているつもりだ。」!!」

「……勇者様を前に、立ち上がるなど。」

「構わん、立て。」

少女は、何とか立ち上がろうとするが、立つ事はできずに倒れてしまった。

「足の腱を削がれては、立てまい。それは、自然に出来る傷ではあるまい。」

「何もかも、お見通しなのです。そうですね。そうです。これは、私が逃げる事が出来ぬように、王の命令によって出来た物です。」

もう全てを諦めたように微笑みながら、少女はこれまでの事を語りだした。

少女が生まれた場所は、牢屋の中だった。少女の母は奴隷で、若い奴隷商人との間に出来たのが、少女だった。そこが普通の奴隷商なら良かった。だが、彼女が生まれたのは闇の奴隷商だった。

「母の妊娠が分かった時、商売道具に手を出したと若い奴隷商人は殺され。母もすぐに子供を墮ろすよう、言われたそうですが、母は断り、私を生みました。」

「商人は最初、私を殺すつもりだったそうですが、私に人より並外れた魔力があると分かり、私も奴隷にされました。」

それから、数年は外に出ることは出来なかったが、それでも、平和だったそう。奴隷商人は商売道具に無暗に手を上げたりはしないし、食事も生きていける分はもらえるらしい。健康な奴隷とそうでない奴隷どちらが欲しいかという問題らしい。

「しかし、それも長続きしませんでした。気付くべきだったんです。何故、私たち親子がなぜ売れないのか。当時、私はただ買い手がつかないだけだと思っていました。」

「ですが、違ったんです。母が私を売らないようにしていたんです。商人たちの仕事を手伝う代わりに、私たち親子が一緒にいられるように。」

少女が生まれて10年、商人たちのもとへ王国の騎士たちがやってきて、商人たちを連れて行った。彼らは、相当悪事を重ねていたらしく、国が動き彼らを捕らえ、彼らを処刑していった。そして、その中には少女の母も含まれていた。



「私は、母が今までしてきたことを、母が死んだ後から知りました。母は私の為に、多くのものを犠牲にして、なのに私は、何一つ返すことが出来なかった。」

「勇者召喚には大量の魔力が必要なんです。だから、国は勇者召喚をしたくても出来なかった。本来なら、でも私ならその魔力を用意できる。」

「国は約束してくれました。私が、勇者召喚を成功させ呼んだ勇者が魔王を倒したら母の罪を消し、大きな功績を残した者の名が刻まれる、王国の石碑に母の名を刻むと。だから、お願いです。魔王を倒してください。」

確かに、少女の境遇には大いに同情するし、助けてあげたいとも思うけど、一つ気になることがあるのだ。老人は、世界を救ってもらおうとは、言っていたが魔王を倒してとは言っていないなかった。勿論、言い忘れてたって事も、ないとは言えないけど安易に魔王を倒したら世界が救われるとは、俺には、思えない。この世界は現実なんだ。それに、少女もきつと。

「断る。」

「そう……ですよね。」

「雑種、貴様が心の底から為したいことは何だ。」

「ですから、母に恩を返すことです。」

「詰まらん、己が欲を晒すことがそうまで恐ろしいか。」

「な、何を言っているのですか。私は本当に「貴様が、初めて外に出た時の事を話していた時、明らかに外に対する羨望と自由への渴望が見えた。」!!」

「出来るのなら、今すぐにでも外に出て自由になりたいのではないか。しかし、貴様の中に母がいる。自分の為に全てを捨てた母が。自由になりたい、しかし、母のことが気に掛かる。貴様の中ではさぞかし、愉快なことになっているのだろうか。」

「違う。そんなことない。お母さんを、邪魔みたいな言い方しないで。外には行きたい、自由になりたい。でも、お母さんは私の為に、いっぱい頑張ったんだから。わたしも、お母さんの為に頑張らないと。」

泣きながら、頑張らないと、という少女は見ていても痛々しかった。だがこれも必要なこと彼女に外に行きたい、と認めさせない事には何も始まらない。

「ふん、ようやく、認めたか。さて、では行くぞ。雑種」

「……へ、行くつてどこに。」

「まずは、街だな。我はこの世界の事について知ってることは少ない。故、この世界の事を調べに行く。」

「それで、なんでわたしまで。」

「外に出たいのであろう。ならば付いて来い。」

「だから、外には出たいけど。お母さんの事があるから。」

「何だ、そんなことか。ならば簡単だ。我が世界を救う。さすれば、雑種、貴様は世界を救う旅を共にした。者となる。その功績で母の名を刻むなり何なりすれば良い。」

「え、ええええ。何で、さっきわたしのお願い断ったじゃん。」

「我が断ったのは魔王を倒すことだけだ。世界を救うことを断った覚えはない。」

「そういえば。じゃなくて。確かに、魔王を倒してくれとお願いしたのは私ですが。」

「理解したのならば良い。それと、余り畏まるな、物知らぬうちは、ただ王たる私の威光に目を輝かせておればいい。分かったな、イブ」

「はじめて、初めて名前で呼んでくれた！ は、そうだ、名前で思い出した。ねえ、勇者様の名前ってなんていうの。教えて。」

「この我に名を問うか。よかろう、いずれこの世界に響き渡る名と心得よ。我が名は、

世界最古の王にして、世界の全てを手中に収めた、全ての英雄たちの王、英雄王ギルガメッシュである。」

## 第一章 辺境都市エデン編 英雄王、街を目指す

イブに名乗り、外に出ようとすると、イブが慌てて止めた。

「待って、王様。外には国の兵士がいて、いきなり外に出るのは危ないかも。」

「ぬ、戯けめ。その程度の事、我が分からぬと思うたか。」

「え、じゃあ、どうするの。そのまま行けば、兵士に捕まっちゃうよ。」

「喜べ、イブ。貴様には、我が財宝に乗る栄誉を与えよう。」

幸い、この聖堂にはあれを出しても大丈夫な広さがある。英雄王の能力を使うのは、初めてだが、どうすればいいのか、まるで、手を取るかのように分かる。俺は、片手をあげ宝物庫の名を告げる。

ゲート・オブ・バビロン  
「王の財宝」

すると、俺の頭上に大きな波紋が現れその中から黄金に輝く美しい、飛行機のようなものが現れた。イブは、突然現れた、それに目を輝かせて、興奮しながら、俺にそれについて聞いてきた。

「王様！ あれ王様の？ どうやって出したの。すごい綺麗だね。」

「無論、あれは我が宝物庫より取り出した、我が財宝の一つだ。」

「ねえねえ、名前、名前何ていうの。教えて。」

「ふん、いいだろう。あの財宝の名は天翔ける王ヴァイマーの御座ナ。思考と同じ速度で飛ぶことが出来る。」

「お願い、王様。わたしを、ヴァイマーナに乗せて。」

「我の話を聞いていなかったのか。貴様には我が財に乗る栄誉を与えろと言ったはずだ。」

「そうだった。ありがとう、王様。」

「理解したのであれば乗るがいい。行くぞ外の世界へ。」

「うん！」

ヴァイマーナに乗った、俺は乗ったイブが怪我をしないよう、ヴァイマーナの中に入れると、ヴァイマーナを起動させ聖堂の天井を壊し、外に出た。聖堂の外を警備していた兵士達や、近くにいた民たちは、突

如現れた、正体不明の黄金の空飛ぶ舟が、去っていくのを見送る事しか出来なかつたという。

◇◇

聖堂があつた王都から、離れたところで景色を楽しめるくらいの速度に緩め、ヴィマーナの中へ入り、青色の液体が入つた小瓶を、イブに渡した。

「王様、これつて。」

イブは突然、差し出された小瓶に戸惑いながら受け取つた。

「飲むがいい。」

「飲むつてこれを？ 良いけどあんまり美味しそうじゃ無いね。ん、美味しい！」

「飲んだな、では立て。」

「え、王様、知つてるでしょ。わたし立てないよ。」

イブは悲しそうに笑つた。

「いいから立て。王命だ。」

「分かつたよ。立てなくても怒らないでね。……え、何で。」

「貴様に飲ませたのは霊薬エリクサー、あらゆる傷を治すことが出来る。歩いて外に出てみると良い。」

俺は、イブなら元気いっぱいはしゃぐと思つたが、イブは自分で歩いて、外に出ると動きを止めた。どうしたのかと様子を窺うと、イブは泣いていた。俺が何故泣いているのか聞くと。

「あれ、何で、痛くないし、悲しくもないのに。もう一度歩いて嬉しいのに、外に出れて楽しいのに。ねえ、王様、教えて、何で涙が止まらないの。」

「ふん、知れたこと。人は生まれる時、泣きながら、生まれてくる。それが、己が醜さ故かは、知らんがな。母の骸にしがみつき、泣いていた子は自分の足で立ち上がり。今生まれ変わったのだ。」

「生まれ変わった。……王様、私どうしたらいいのかな。」

「戯けが。貴様は今、自由だ。己が求めることを為すがいい。笑いたい時に笑い、怒りたい時に怒り、泣きたい時に泣く。それこそが人だ。それを他者に委ねては、もはや、人とは呼べぬ。犬畜生にも劣る雑種

にすぎぬのだから。」

「うん。ありがとう、王様。わたし自分がやりたい事をやる。」

俺が伝えたいことは、イブは自由になったんだよ、出会った頃とは違うんだよということ。そして、自由に生きていいんだよ。ということだけだったのだが。英雄王口調が暴走している。俺には、どうすることも出来ない。まあ、イブは泣き止んだし、言いたいことは伝わったみたいだから良いけど。それより、俺は、求めてたこと為してないし。今の言葉、俺も、雑種って事になるんじゃないや……

「所で、王様。どこに街があるか知ってるんですか。」

「下を見ろ。あの馬車たちを案内人にすれば、いずれ、何処かの街には着くだろう。」

「なるほど。さすが、王様。」

そうして、地上を走る馬車を追っていると、馬車の進行方向の森を拓いて作った道に近い森に、隠れた武装している男たちがいるのが見えた。イブに聞いてみると。

「え！ それって盗賊かも。道路を通る人たちを襲うつもり何じやないかな。それにしても、わたしには、全然見えないよ。目が凄くいいんだね、王様。」

どうやら、イブにはまだ盗賊は見えないらしい。確かに、あの盗賊たちは10キロは離れているにも拘らず盗賊の細部まで見ることが出来た。さて、馬車たちは歩いていて護衛に合わせているのだろう。自足5キロ程度で走っているため。盗賊が居る所までは、およそ、2時間といった所か。

「ねえ、王様。どうするの。」

「馬車の護衛たちだけで、対処できるならそれでよし。出来ぬのであれば、我が介入する。まだ街が見えぬ。今、案内人に消えられては、面倒だ。」

◇◇

「野郎ども、矢を放て。」

首領と思しきものに命じられて部下の十数人が矢を放つ。護衛たちは矢を避けるが、別の盗賊に攻撃された隙に、矢は護衛の一人の足

に当たり、そこを、剣を持つ盗賊が切りかかるが、別の護衛に止められる。

「ジューン大丈夫か。すぐにマーチの所へ。」

「悪い、ジユライ。すぐ戻る」

護衛は全部で12人。それなりの訓練を積んでいるようで、盗賊たちを次々と倒していくが、盗賊の数が多すぎた。一人また一人と負傷している。このままでは負けると思った。その時

「恐れを知らぬ戯けどもよ、この我の道を阻むとは、万死に値する罪としれ。せめて散り様で我を興じさせよ、雑種。」

金の鎧を纏い、王の風格を持つ者が突如現れた。その男が、片手を上げると、背後に幾つもの波紋が現れ、その中から、生涯をかけても、触れる処か、目にする事すら無いと思わせる、剣や槍が盗賊にその刃を向ける。男が手を下すと、まるで王に従う兵のように、反応すら出来ない速度で、射出された。

「なんだこれ、こんなのきいて」

「た、たす」

「いやああああ」

盗賊たちは悲鳴を上げ、死んで逝く。そして、一分が経った頃には、そこには、盗賊たちの命を奪った武器たちは姿形すらなく、地面の破壊跡と盗賊の死骸だけが唯一、武器が存在していたという証拠だった。

◇◇

さて、盗賊は片づけた。そう、俺は盗賊を殺したのだ。にも拘らず俺の心は平常時と変わら無い。やはり、ギルガメツシユの精神に多少なりとも影響を受けているのだろう。だが構わない、それがこの力の代償というなら安すぎる。我思う故に我あり。俺が存在しているのかと考える限り、俺は存在しているのだから。

「王様。もう出て大丈夫ですか。」

「構わん、来い。」

「はい。」

馬車が盗賊と出会うまでの時間に、イブと一緒に野暮用を済ませて

からイブには危ないので、隠れてもらっていた。イブと合流すると、護衛を仕切っていた、男が話しかけてきた。

「あの、助けていただいた、ありがとうございます。僕の名前はドイツンと言います。あのままでは、僕も皆も死んでいたかもしれない。」

男は、少し警戒しながら、助けた、礼を言ってきた。まあ、あれだけの力を見せたらそうなるのが当たり前か。

「構わん。我は私の目的のために、盗賊たちを掃討しただけだ。それに、貴様らには聞きたいことがある。」

「聞きたい事でしょうか。」

「ああ。貴様らは今どこへ向かっている。」

「僕たちは、辺境都市エデンに行こうと思ってます。」

「そうか、では、貴様らには、我にエデンへの道を案内する栄誉を与えよう。」

「駄目ですよ、王様。そんな言い方。お願いします、わたし達、エデンへの道が分からないんです。一緒に行ってくださいませんか。」

## 英雄王、街に着く

ドイツセンに連れて行ってくれませんかと言おうとしたが。やはり、英雄王口調がそれを許さず、案内する榮譽を与えるなんて、超上から目線になってしまった。日常会話レベルなら何とか少し上から目線、程度に抑えられたと思うけど、ギルガメッシュがしないような事をしようとする、口調の補正が強くなるようだ。今回の交渉はなるべくイブに任せよう。

「えっと、つまり僕たちと一緒にエデンに行きたいという事でいいんですよね。」

「うん。どうかな。勿論、無理にとは言わないけど。」

「僕は、ただ雇われただけなので、依頼人に確認を取らないといけないので、少し待つてもらっていいですか。」

「うん。お願いします。」

ドイツセンが依頼人に確認しに行った後、イブにここに来る前に言ったことを確認した。

「覚えてるよ。王様が、異世界から召喚された勇者だって事と、ヴィマーナの事を言わなければ良いんだよね。」

「そうだ。その二つを覚えておけばよい。」

ヴィマーナは移動手段として、かなり使い勝手がいい。なるべくその存在は隠しておきたい。イブと話しているとドイツセンが駆け寄ってきた。

「お待たせしました。僕の依頼人が、直接会って話がしたいと言ってるんですけど。」

「そうだよ。直接お願いしないと。いいよね、王様。」

「ほう、この我を呼びつけるとは、いいだろう。依頼人とやらの元へ案内するがいい。」

ドイツセンの後を付いていき、ドイツセンは一台の馬車の前で止まると、ノックをして来たことを知らせると、中から恰幅の良い中年の男が出てきた。

「どうも、初めまして。私はエデンにて、服の仕立てなどをしておりま



す。グッチと申します。」

「初めまして。わたしは、イブと言います。実は、グッチさんにお願ひがあるんです。」

「ええ、ディッセンから聞いています。エデンへの旅路に同行したいと。」

「そうなんです。どうでしょうか。」

「勿論、大歓迎です。命の恩人のお役に立てるなら喜んで。しかし、もしもの際は、ぜひそのお力をお借りしたく。」

「我が乗る馬車を襲う不屈き者の相手はしてやろう。しかし、自らの分はわきまえる事だ、グッチ。」

「分かつております。……お名前をお聞きしてもよろしいでしょうか。高貴なお方。」

「良からう。我が名を知るところを許そう。心して聞くが良い。ギルガメッシュ。それが、我の名だ。」

「畏まりました。それでは、出発の準備が出来たようなので、馬車の中へどうぞ。」

そうして、何とか共にエデンへ向かうことが出来たが、何故、同行しなければならなかったのか。エデンへ行くだけならば、上空をついて行けば良かったが、しかし、重要なことに気が付いた。イブが言うには街などに入るには、身分証のようなものが必要らしいのだ。無論、異世界から来た俺は勿論、イブも国に捕まるまでは奴隷として、捕まった後も軟禁され身分証を知識として知ってはいても、持つてはいないそうだ。まあ、身分証の解決策は考えた。しかし、問題は他にも何か重要なことを知らない可能性がある以上、この人達から出来る限り情報を得ておきたい。

「さて、ギルガメッシュ様はエデンに何か目的があるのですか。」

「わたし達は、エデンに冒険者になるために行くのです。」

「冒険者ですか。ですが、冒険者になるなら、他の所でもできますが、どうして、エデンなのでしょう。」

「グッチ、我が言を忘れたか。分をわきまえろと言ったはずだが。」

「申し訳ありません。ギルガメッシュ様、詮索が過ぎましたな、ご容赦

を。」

「次はないぞ。」

俺は、先ほどの盗賊に圧倒的な力を見せつけた。だから、このように、余り探らたくない所は俺が脅し。聞きたい情報はイブが子供なのを利用し、無知であると思わせ聞き出すと予め決めていた。もつとも、イブが無知なのは実際にそうなのだが。グッチらとの関係が悪くなりそうだが、仕方ないと割り切る。こうして、俺たちは、辺境都市エデンの情報を手に入れた。

辺境都市エデンに着くのは明日。その名の通り、王国の辺境に位置している。どうやらヴィマーナで王都から離れるときに、速度を出し過ぎたようだ。エデンと王都は通常は馬車で1か月にかかるそうだ。エデンは魔物が多く住む、魔の森に近く、更に、ダンジョンにも近いと人が住むには向いていないと思うかもしれないが。魔物を狩り、その素材を売り、生活している、冒険者たちには楽園のような所だそう。勿論、魔物を狩る力がある冒険者に限られるが。

そして、人が集まれば需要が生まれ、需要が生まれれば供給する人達が集まり、さらに需要が生まれ。そうして、加速度的に冒険者たちが作った集落は、村、街そして、都市へと成長した。その都市は、冒険者たちの楽園、辺境都市エデンと名付けられた。

俺たちが最も知りたかった情報も街には身分証が無ければ入れないが、金銭を担保に都市に入ること自体は出来るという、既に知っている情報だけだったが。話している間に馬車は開けた、場所で止まった。

「ギルガメッシュ様、今日はもう日が暮れます。このあたりで野営をしようと思いましたが。いかがでしょうか。」

「構わん。」

グッチが指示を出すすと皆が野営の準備を始めた。

「ギルガメッシュ様、野営の準備が終わりました。こちらへどうぞ。」

一応、手伝おうとはしたのだが、ギルガメッシュ様にそのような事はさせられませんとグッチに断られた。少し脅し過ぎたかもしれない。グッチが少し震えている。知りたい情報も知れたし、これからは

優しくしよう、英雄王補正で伝わるかどうかは、分からないが。手始めに食事だな。

「グッチ、食事の用意は不要だ。我が用意しよう。」

「ですが、ギルガメッシュ様にそのような事をさせるわけには。」

「良い。貴様らを我が晩餐へ招待しよう。会場が外というのは気になるがな。」

「畏まりました。では、そのように伝えてまいります。」

さて、宝物庫の中のあれなら必ず、グッチ達も満足するだろう。そんなことを考えていたらグッチが他の人達もつれてきた。

「王様、料理なんてできるの?」

「ふん、愚問だな。王たるこの我が料理程度、出来ぬはずは無い。もつとも、今回は我が作る訳では無いのだがな。」

「え、作らないってどういう。」

「ギルガメッシュ様、他の者を連れてまいりましたが、料理はギルガメッシュ様が作られるのではないのですか。」

「そう急くな、貴様らには我が財の一端を見せてやろう。」

俺は、素晴らしいながら、宝物庫の中に手を入れ、ある物を取り出す。

「テーブルと、テーブルクロス? 王様、高価なテーブルやテーブルクロスはいいけど料理が無いと意味ないよ。」

「ふ、我が財を侮るなよ! イブ。我が宝物庫にただのテーブルクロスなど存在しない。これは、魔法のテーブルクロス。食べたい物の名を唱えながら、広げると望むがままの料理が出現する。最高級の品よ。」

テーブルクロスについて説明しながら、出したテーブルに、料理名を唱えながら、テーブルクロスを広げる。すると、瞬間に臨んだ料理が出現し、美味しそうな匂いを放ち、食欲を誘う。俺の言葉を訝しんでいた者たちも今では、料理に釘付けだ。

「では、食すがよい。」

俺がそういうと、皆一目散に料理を口に運ぶ。

「王様、凄く美味しい!! わたし、こんな料理食べたことない。」  
「うめええ」

「最高！」

「遠慮する事はない、完食せよ！完食せよ!!」

食べた人達は、次々と感想を言った。みんなの口に合ったみたいで良かった。食べ切れない程の量があった、料理をすべて食べた人たちは、俺にお礼を言ってくる。

「ありがとうございます。ギルガメツシユ様、今宵の晚餐決して忘れません。」

「ありがと、王様。また食べさせてね。」

夜が明け、早朝に出発し、俺たちは昼前に、辺境都市エデンへと到着した。

## 英雄王、冒険者になる

辺境都市エデンは都市全体が強固な城壁に囲まれた、城郭都市であった。城壁には東西南北に一つずつ門がある。俺たちが今通ろうとしているのは、南門。エデンは南に王都、北に魔の森。更に、魔の森の先には、ミーティア王国と冷戦状態のポラリス帝国がある。その為、エデンは王国にとって、魔物と帝国への砦のようなものだろう。「では、身分証を提示してください。無い場合は一人、金貨1枚を担保に入ることが出来ますが。」

「わたしと、王様の分で、金貨二枚です。」

「確かに。お名前は。」

「わたしは、イブです。」

「我が名は、ギルガメッシュ。」

「では、どうぞ。お入りください。担保の金貨は身分証と引き換えに半額返却いたしますので。」

さて、何故俺たちがこの世界の金を持っているのかというと。盗賊を掃討する前の野暮用で得たのだ。俺は、盗賊を見つけると同時に、盗賊の罫も見つけていた。グッチ達が盗賊と会うまでの間、罫を探索していたのだが英雄王の黄金律のせいだ盗賊たちの財宝の隠し場所を見つけてしまい、財宝を得ていたのだ。

「なるほど、さまざまな人種がいるのだな。」

「ギルガメッシュ様は他種族がお嫌いですか。」

「いや、随分と我を興じさせる。」

「はあ、私はこれで失礼しますが、ギルガメッシュ様はいかがなされますか。」

「冒険者ギルドに行つて、冒険者になるのです。」

「そういえば、確かそのような事をおっしゃってましたね。ギルドの場所は分かりますか。」

「あ！ 分からない。どうしよう。」

「あの、もしよろしければ、僕が案内しましょうか。ギルドに依頼達成の報告をしないといけないし。」

エデンの中に入り、グッチとこれからの事を話していると、ギルドの案内をディッセンが申し出た。断る理由もないので、その申し出を受けることにした。

「よかろう。思えば、貴様は、この我を案内する榮譽を幾度も得ている。世界広しと言えど、貴様ほど幸運な者もいなかろう。」

「では、私はこれで。服がご入用の際はぜひ、当店へ。精一杯サービスさせていただきます。」

そういつて、グッチは去り。俺たちも、冒険者ギルドに向かうのであった。

◇◇

その日、冒険者ギルドエデン支部は特に代わり映えのしない一日だった。しかし、ちょうど昼時、ギルドのスイングドアが押され一人の青年が入ってきた。これはいい、その青年には見覚えがあり恐らく、依頼達成の報告にでも来たのだろう。次に入ってきたのは目を好奇心で輝かせている少女だった。これもまだいい、滅多にないが、子供が好奇心に任せてギルドに入ってくるのはことはある。問題は、最後に入ってきた男だった。その男は金の鎧を纏い、金髪をオールバックにした、赤い目の男は、ギルド内を見渡すと、

「ふん、強者が集まる都市と聞いてきてみれば、拍子抜けもいいところだ。強者が集まる都市と聞いてきてみれば、拍子抜けもいいところだ。強者どころか、戦士すらいないとは。」

男はいきなり、ギルドにいた者達を見下し始めた。普段ならそんな事をされれば、拳を握って襲い掛かっただろう。或いは、剣を抜く者もいたかもしれない。それほど、男が言った言葉は彼らにとつて許しがたいことなのだ。にも拘らず、襲う者はおろか席を立つ者すら現れない。それは、男から発せられる威圧感のようなものが原因だった。動けば殺される、この場にいた全員がそう思った。

「己が誇りを傷つけられてそれでもなお、立ち上がる事すらできない貴様らは、犬にも劣る雑種よ。」

素晴らしいながら、男は彼らに対して興味を失ったのか、受付にまっすぐ歩いていき。

「冒険者登録をするのはここか。」

「はい、そうです。」

「冒険者登録をする。我とこの小娘だ。」

「王様、酷い。小娘じゃないもん、イブだもん。」

「畏まりました。」

受付嬢は、おびえながら、登録の準備を始めていく。

「それでは、冒険者について説明させていただきます。」

冒険者とは、一般的には冒険者ギルドに所属しているものを指す。冒険者と依頼には力量や難易度に応じてランク付けがなされていて、S、A、B、C、D、Eと下がっていき、登録したばかりの冒険者は基本的にEランクの依頼から始めることになる。冒険者になるには、銀貨5枚と名前と種族が分かれば誰でもなることが出来る。身分証としては最も手軽に入手することが出来るが、身分証としてギルドに所属することを阻止するため、一定期間Eランク・Dランクにいたり、権利を剥奪され、二度と冒険者になることは出来ない。厳し過ぎると思うかもしれないが、期間はランクごとに1年。依頼を10回達成すると、Dランクになることが出来る、Cランクには、ギルドからの依頼を達成することになることが出来るが、Cランクになるのは簡単だがその一つ上のBランクになるのは相当難しく、Cランクの実力はピンキリらしい。

「依頼を受ける制限はありませんが、高ランクの依頼を無理に受理し命を落とす、或いは、負傷した場合はギルドは、責任を取りかねますので、ご了承ください。」

「また、冒険者が一般人に危害を加えるのは犯罪ですが、冒険者同士の場合は余程の事が無い限り、ギルドは介入しませんのでこちらもご了承ください。」

「説明は以上となります、何か質問はございますか。」

「依頼は今からでも受けられるのか。」

「はい。ギルガメッシュ様、イブ様の冒険者登録は完了していますので。」

「では、今ある依頼の中で最もランクの高い依頼を受ける。」

「は、あの、説明を聞いていましたか。命を落としたとしても、ギルド

としては責任を取りかねます。」

「……もう一度だけ言う。最もランクの高い依頼を受ける。三度は言わんぞ。」

「か、畏まりました。それではAランクの魔の森のドラゴン討伐をギルガメツシユ様とイブ様が受けると言うことでよろしいですね。」

「いいだろう。」

◆◆  
素晴らしい男と少女はギルドを去っていった。

◆◆  
何故俺が、ギルドで冒険者たちを挑発し、いきなり、高難易度の依頼を受けたのかそれは、ドイツセンから聞いていた、エデンの冒険者の気質のせいだ。エデンは魔の森が近く、ダンジョンもある。その為、強い冒険者が国中から集まるらしい。その為、エデンの冒険者は弱者を軽んじる風潮が出来ているようだ。だからこそ、最初が肝心、俺たちに関わると不味いと、思わせなくてはならず、先の態度に繋がった。

「王様、わたし達が受けた依頼って正確にはどんななの。さっきの説明じゃ、ドラゴン討伐位しか分からなかったけど。」

依頼書によれば魔の森の近くにドラゴンが住み着き、冒険者が魔の森に入ることが出来ないらしい。ドラゴンを見たものによると赤い角を生やした赤いドラゴンだそうだ。俺たちは、赤いドラゴンを討伐、ドラゴンの角をギルドに持って行けば、依頼達成となるわけだ。エデンの北門から出てドラゴンを住み着いたとされる所へ向かっていると、こちらに飛んでくる赤いドラゴンが、イブも見えたらしく。「へー、ドラゴンってあんな感じなんだね。初めて見たよ。」

ドラゴンとは、冒険者であっても出会えば死を覚悟する存在らしい。ドラゴンを見てもデカイトカゲとしか思わない、英雄王の精神に影響されている、俺が言うのもなんだが、イブは怖くないのだろうか。「怖くないよ。だって王様がいるもん。王様ならドラゴンなんてすぐに倒しちゃうんだから。」

「ふははは！　そうか。ならば見ているがよい。天駆ける竜が地に落ちる様をな」



イブと話している間にドラゴンはどんどん近づいてくる。俺は波紋を出し、そこから一本の魔剣を射出する。それは、高速でドラゴンの眉間を貫いた。ドラゴンは徐々に高度を落とし、やがて大きな音と共にドラゴンは地に落ちた。

「ふん、興ざめな幕切れだ。見よ、この間抜けな死に顔を。最も魔剣グラムが相手では致し方ないか。……戻るぞイブ。」  
「うん。」

ドラゴンの死体を宝物庫に入れると、俺たちはエデンへと帰るのであった。帰る道中、理解したこの世界において英雄王の力は強すぎる。だからこそ、慢心をしない事を心に誓った。英雄王だからこそ、ギルガメッシュだからこそ慢心できる。俺はただ力を持っているに過ぎないのだから。

## 英雄王、騒動に巻き込まれる

エデンへ戻った俺たちは、ギルドへ向かった。ギルドに着きドアを開けると、それまで騒がしかったのが嘘の様に静まり返った。俺はそれを気にする素振りを見せずに、受付へ向かう。だが、それを遮るものがいた。その男は、俺より20cmは大きく、俺を見下しながら、「おい、新入りが何、俺を無視してんだよ。新入りならまず、俺に挨拶しろ。ん、お前、Aランク依頼を受けた身の程知らずか。ま、その様子じゃ、怖くなって途中で逃げ出してきたか。はっははは!!」

「一度しか言わぬ。どけ下郎、さすれば我手ずから慈悲をやろう。」  
「あ、今なんつった、どけだ、俺になめた口きいてんじゃねえよ。」

男が、俺に殴りかかってくる。だが、男の拳が俺に当たる前に、突如として男が殴ろうとしていた腕が吹き飛ばされた。

「ぎゃああああ」

「なんだ貴様は道化か？ なればもつと華美のある悲鳴で我を愉ませよ。」

「ごめんね。うちの馬鹿が不快な思いをさせたみたいで。」

「構わん。だが、道化ならば、次回はもつと我を興じさせることだ。」

「ふふふ、分かった。伝えておこう。受付に用があるのだろう。私は、この馬鹿の始末をつけてくる。」

そういつて、いきなり現れて、男の腕を吹き飛ばした。女は男を引きづってギルドから出て行った。

「ドラゴンを狩ってきた。死体はギルドの前に出せばよいのか。」

「へ、狩ってきた、ドラゴンをですか。本当に。」

「ほう、我が言を疑うか、雑種風情が。」

「も、申し訳ございません。ええつと、死体はギルドの裏の空き地に出していただけると。」

「面倒だ。ギルドの前でいいな。我はそのまま帰らせてもらおう。報酬は後日で構わん。」

あの男を痛めつけて、恐怖を植え付け、関わる気が起きないようにしようと思ったのだが、あの女のせいで計画が狂ってしまったので、

なるべく、傍若無人な振る舞いを意識しながら、ドラゴンの死体を大勢に見せつけて、俺の力を誇示する。ギルドの前にドラゴンの死体を出す、いきなり、巨大なドラゴンが現れて周りの人たちが悲鳴を上げる。これだけ目立てば、後は勝手に噂が広まって恐れてくれるだろう。

その予想通り、その名は瞬く間にエデンに広まった。金髪赤目の男、ギルガメツシユは竜殺しの英雄として。予想外の方向に。

◇◇

俺たちは、宿に一泊し特にやることもないので、ギルドに行くことにした。

「ねえ、王様。世界を救うって、どうやるの。」

「さてな、まずは、さしあたり、魔王などこの我以外に王を名乗る、不屈き者にでも会ってみるか。」

「魔王か、どんな感じなのかな。やっぱり、角生えてるのかな。楽しみななあ。」

ギルドに入ると、予想していた通り、注目されている。ただ、見限り、周りの者たちに恐怖はなく、むしろ、期待や、安堵といった、感情が見て取れる。一体どういうことだ。疑問を感じながら受付に行き、先日と同じ受付嬢に話しかけると、頬を赤く染めながら、

「お待ちしておりました。ギルガメツシユ様。ギルドマスターがお話をしたいそうです。いかがでしょうか。」

「いいだろう。我も昨日の件で話したい事がある故な。」

俺の返事を聞くと、受付嬢はギルドの奥にある階段を上つていき。俺たちは、それについて行く。階段を上ると、そこは一本の通路になっていて、左右に数個、奥の一つ、扉があり、ギルドマスターがいるのは奥の扉らしい。受付嬢は奥の扉の前で立ち止まると、俺たちが来たことを伝えると、奥から入つていいと、声が聞こえるが、何処か聞き覚えのある声だった。中に入ると。

「ありがとう、ミーシャ。下がっていいよ。やあ、昨日ぶりだね。私の名前はヘレア・アウトレア。今日は話せて光栄だ、勇者様。」

そこにいたのは、昨日、腕を吹き飛ばした、あの女だった。それは

いい、他の者たちは見えなかつただろうが、視力高いこの体は、ヘレナがしたことを正確に見ていた。特別な事はしていない、ヘレナは見えない程の速度で近寄り、腕を吹き飛ばした。それだけだ。だが今、ヘレナは何と言った。勇者と言った。この世界にきて、イブ以外に勇者と知る者はいない。何故ヘレナが知っている。

「驚かせたみたいだね。実は、私は特殊な目を持っていてね。相手の種族と肩書のような物が見えるんだ。例えば、君の場合は、種族は半神半人、肩書は勇者だ。何故、急にこんなことを話すのか、実は、お願いがあつてね。これから、数日後に魔物の大群がエデンに攻めてくる。これは決定事項だ。」

ヘレナが言うには、原因はダンジョンの魔物の暴走<sup>スタンピード</sup>だと言う。ダンジョンとは突如として出現し体内で魔物や財宝を生成する。ダンジョンは体内で無限に魔物を生成し、普段は決して、ダンジョンの外に出る事が無い、魔物が一定数に達すると、突如、一斉にダンジョンの外に出て暴れだすのだ。その為、ダンジョンの核を壊し、ダンジョンを崩壊させるか、定期的に魔物を間引かなくてはならない。

「今回、魔の森にある、ダンジョンに行った冒険者が、スタンピードの兆候を発見したそうだ。」

「エデンの冒険者は、魔物を間引いていなかったの？」

「いや、定期的にギルドから依頼を出して、つい先日にも出したばかりだ、だからこそおかしいんだ。」

「その冒険者が虚偽を言ってる可能性は。」

「それについても、調べた。ギルドから人を出し、ダンジョンに行かせたが、その者もスタンピードの兆候があると」

俺への願いは、魔物のスタンピードの殲滅してほしいということか。

「今、エデンの高ランク冒険者は依頼に出っていて、すぐに帰ってこれない。今いるものでも、対処は可能だと思うけど、エデンにも被害が出る可能性が高い。」

「貴様が戦えばよいのではないか。」

「私の力は個人向け、大群相手では分が悪い。それに引き換え、君の力

は大群の殲滅にぴったりだと思っただ。」

俺の力をどうして知っているのか。いや、グッチの護衛たちは、冒険者、彼らから聞いたのか。

「ディッセンから君の事を聞かせてもらった。彼を責めないでね。私が強引に聞いたんだ。」

「なるほど、……いいだろう。しかし、条件がある。それが飲めぬ場合は、分かっているな。」

「ああ、勿論だ。それで、条件というのは。」

「一つ、私の冒険者ランクを上げよ。二つ、魔王についての情報。三つ、私の興が乗るような場所を教えよ。」

一つ目は有名になるため、二つ目は魔王に会うため、三つ目は少しくらい異世界を楽しんでもいいじゃないか。

「二つ目と、三つめは、分かった。一つ目については、少し条件がある。」

「ほう、言ってみろ。」

「正規の手段ではなく、功績によってランクを上げることが出来る。ただ、その場合は多くの証人が必要になるんだ。功績については、一人でスタンピードを殲滅で十分すぎる。エデンはそれだけ、重要な都市だから。でも、証人を得るためには、都市の近くで殲滅し大勢の人に見てもらわなくてはならない。」

「つまり、都市から見える範囲で、都市に被害を出さずに殲滅しろと。」  
「うん、そういうことになるね。」

「面倒だが、致し方ないか。いいだろう、この我が引き受けてやろう。」  
「ありがとう!! 君はエデンの救世主だ。」

## 英雄王、服を買う

スタンピードの殲滅の依頼を引き受けた俺達は、部屋を出て受付に行き、昨日のドラゴン討伐の報酬を受け取った。ミーシャというらしい受付嬢が、ドラゴンの素材をどうするかを聞いてきた。

「ドラゴンは鱗は金属より軽く、強度もある為鎧に、牙や爪は剣や槍など、とにかく、使えない所がない様な素材の宝庫なんです。可能であれば売ってもらえると助かるのですが。」

「よかろう。トカゲの一匹や二匹興味などないわ。」  
「ありがとうございます。」

お礼の言葉を、背中に聞きながら、ギルドを出る。スタンピードの正確な日時が分かるまで、エデンを出ることは出来ないのです、この際にエデンを見て回るというのも面白いかもしれない。そういえば、異世界初の都市だからな。そうと決まれば、店などが多く並ぶ商業地区に向かうか。

「イブ、商業地区に向かうぞ。」  
「分かった。何か買うの王様。」

その時、イブの服装を見た、イブは修道服を白くしたような服を着ている。そういえば、この服以外、着ているところを見たことがない。  
「イブ、その服以外は持っているのか。」

「え、持ってないけど。でも、この服丈夫だし、王国が何着もくれたから。」

「よし、買うものが決まったぞ。我と貴様の服を買う。」  
「いやいや。わたしのはいいよ。どうせ似合わないし。」

「王たるこの我と共にいる者が、常に同じ服では味気なからう。では、往くぞ、案ずるな当てはある。」

商業地区はエデンの南つまり俺たちが初めて、エデンに入った門がある場所だ。そして、商業地区の一角、その店の前に俺たちは立っていた。中に入ると、そこには見知った男がいた。

「貴様の店を見て来てやったぞ、光栄に思うがいいグッチ。」

「これは、ギルガメッシュ様、イブ様、今回はどのようなご用件で。」

「我とイブに服を見繕え。金の心配はいらん。よいな。」

「畏まりました。君、こちらのイブ様を頼むよ。僭越ながら私が、ギルガメツシュ様の服を選ばせていただきます。こちらへどうぞ。」

そういつて、イブは女性店員について行き、俺はグッチについて行く。グッチに座って待っていてほしいと言われ待つこと、一時間、グッチが何かを持ちながら、慌てながら、近づいてきた。

「申し訳ございません。大変お待たせ致しました、ギルガメツシュ様。」

「よい、それで服は決まったのか。」

「はい勿論でございます。最高の物が出来たと自負しています。」

「では、着させてもらおう。」

グッチが選び持ってきたものを着て、店員が持ってきた鏡の前に立つと黒一色の上下に腰から下のマント、マントの裏は赤。着る前から似てると思いつながら、まさかと思つていたが、着れば分かる、これは。FGOの概念礼装。Gilgamesh in NYの衣装そのままだ。俺が驚いていると。俺の反応を不安がったのか、グッチが様子を窺ってきた。

「ギルガメツシュ様、お気に召さなかったでしょうか。」

「いや、気に入った。これを貰おう。」

「ありがとうございます。いや本当に良かった。」

そうしてグッチと話しているとき、イブの声が聞こえた。

「王様。」

「ああ、イブか。」

「どう……ですか。」

振り返るとイブがいた。いつもの修道服ではなく白いワンピースで背中に紐で五芒星があり、その下に大きなリボンがある。

「よいではないか。似合っているぞ、イブ。」

「ほ、本当!! そっか似合ってるか。えへへ。」

「では、金はこれで足りるな。」

俺は、先ほどのドラゴン討伐の報酬をそのまま渡した。

「も、勿論でございます。足りないどころか、むしろ多すぎます。」

「構わん、我とイブに相応しい、物を用意した貴様への褒美だ、受け取れ。」

「ありがとうございます。ギルガメツシユ様。ぜひ今後、当店を御最賃に。」

「ではな、グッチ。行くぞイブ。」

店を出て、街を歩いていると、イブが、

「ありがとう。王様。わたしこんな服着たの初めて。ううん、服だけじゃない。王様との旅は初めてばかり。わたしを、連れ出してくれてありがとう。わたしね、王様の事、大好き。」

「ふっ、何を言うかと思えばそのような事、既に知っておるわ。今更、口に出すことでもあるまいに。」

「そっか。やっぱり王様はすごいなあ。でも例え知ってたとしても今言いたかったの。」

そう言つて、イブは笑つた。生まれてから奴隷として生き、奴隷から解放された後も国に囚われていた。本人は否定するかもしれないが、傍から、見ても不幸と言える人生。そこを、救われ、自由を得て、それを為したのが、英雄王の完璧すぎる外見を持つているのだから、外の世界を知らない、少女が好意を抱くには十分過ぎるだろう。勿論、俺もそうだ。こんなかわいい子供に、懐かれたら、誰でも可愛がるに決まつてる。もし、イブに何かあれば乖離剣を抜くことも辞さない所存。

「ふははは！ まったく、愛い奴よ。近こう寄れ、この我手ずから撫でてやろう。」

「え！ 本当、王様に撫でられるのつてはじめてかも。」

こんな風にイブとじゃれ合うのは初めてだな。まあ、英雄王がこんなことするのは想像できないのに、AUOでは想像できるのが謎だが。宿に戻り、テーブルクロスによる食事を済ませ、眠り。朝起きて、商業地区をぶらつき、宿に戻り寝る生活を続ける事数日。ヘレナに呼ばれ、ギルドに行くと、スタンピードが明日、起こることが告げられた。

「まあ、明日起こつてもエデンに来るのは距離から言つて、一日かか



る。君に戦ってもらうのは、明後日ということになる。」

「それで、まさかそのような事だけで我を呼び出した訳では無かろうな。」

「そうなんだ、じつは、今回のスタンピードがおかしいって話は、前ちよつとしたよね。間引いたばつかのダンジョンがスタンピードを起こすなんてありえない。でもありえない事が起こってるってことは。」

「人為的な要因ということか。」

「うん、私は帝国あたりが怪しいと思ってるけど、証拠は出てこない。仮に、帝国の仕業じゃなかったとしても、人為的である以上、何らかの方法で監視していると思うんだ。君の力も正体不明の相手に知られることになる。しかも、相手の策を一人で邪魔したものとして狙われると思うし。」

「くだらんな。この我を侮るな、その程度、どうということもない。」  
「ふふふ。そうだね。君の言う通りだ。私は、君が倒した、魔物の処理でも考えておくよ。」

それからさらに、一日。ついに、魔物の大群が、エデンに近づいてきた。

「高ランク冒険者は、既に、エデンから排除した。ああ、もう少し、もう少しで全てが終わる。憎きエデンを、魔物が蹂躪したと聞けば、陛下はお喜びになるだろう。そうすれば、我が宿願もきつと聞いて下さる。辺境都市エデン、我が願いの贄になるがいい。クッククック」

## 英雄王の力

その日、エデンは混乱に陥っていた。数時間で魔物の大群がエデンに攻めてくると、冒険者ギルドから報告があったのだ。しかし、魔物の大群が攻めてくるといふのに誰も逃げようとはしなかった。ギルドがら、エデンの被害は皆無に出来ると言われたからだ。それを信じられるのも、これまでの、冒険者の活躍がうかがえる。最も、万を超えると言われる、スタンピードを止めるのが、まさかたった一人とは、誰も思わないだろう。

「今、魔物の大群を監視している、部下から報告があった。本来、スタンピードというのは多くても数万匹程度だが、今回のスタンピードは既に十万を超え、今も増え続けているそうだ。」

「それで、まさかその程度の事で、この我を呼び出したのか。」

「!!」

「言ったはずだ。この我を侮るな。我にとつて、数万も数十万も大差ないわ。本能で動く獣など所詮塵、いくら集まろうと、塵にしかならん。」

俺がそういうと同時に、いきなりギルドマスターの部屋に受付嬢が入ってきた。

「申し訳ございません。たった今、魔物の大群が城壁から見えたと報告が。」

「ふっ、来たか。問答している暇はなさそうだな。先に行く。」

ギルドの外に出ると、王の財宝ゲート・オブ・ハビロンから飛行用宝具を取り出し、使用する。空を飛び、魔物の大群が迫っている、北門に向かう。イブは、巻き込まれ、怪我をするかも知れないので、宿に置いてきた。北門に近づくと、空を飛んでいるからか、魔の森の木々をなぎ倒しながらエデンに迫る、魔物の大群が良く見えた。確かに、あれは、10万は確実にいるな。

では、始めるか。



エデンに迫る魔物たちを城壁から見ている冒険者たちは、まるで、大地が揺れているのではないかと思うほどの迫力を感じた。

「お、おい。ほんとに何にもしなくていいのか。」

「ギルドマスターに言われたろ、何もせずに此処にいろつて。」

「そうだよ、ギルドマスターが何とかするって言つてたし。」

「ああ、第一今から何が出来るんだよ。あの大群に突っ込んでいっても、死ぬだけだぜ。」

「それはそうだけど。こんなに近づいてるのにギルドマスターが一向に現れないじゃないか。」

「それは、確かに。おかしいな。」

「だろう。今からでも何か「不要だ。雑種風情が我の獲物に手を出すな。」」

天から声が聞こえ、天を見ると、金の鎧を着た男が空で、静止していた。まるで、物理法則までを支配下に置いてるようだと、思うほど、この男から出る雰囲気は凄まじかった。

「貴様らはただ、我がすることを見る栄誉に打ち震えていればよい。  
ゲート・オブ・バビロン  
王の財宝」

そういうと、男は片手をあげ、幾つもの黄金の波紋を作り出すと、そこから、剣、槍、斧、あらゆる武器を射出する。打ち出された、黄金の光は雨のように魔物の大群に降り注ぎ、魔物の体を碎き、血をまき散らす。生き残った魔物たちが天を見上げると、

「地を這う虫けら風情が、誰の許しを得て面を上げる。」

天を見上げた魔物たちが、黄金の光によつて碎かれ。悲鳴を上げる。

「貴様らは我を見るに能わぬ。虫けらは虫けららしく、地を眺めながら——死ね。」

雨はまだ、止まない。



エデンが、自分の策で滅びる様を、見て酔いしれようと、男は魔物の大群を見ていたが、

「なんなのだ、あの男は、ありえない。20万の魔物の大群だぞ。それが、こんな、エデンの城壁に触れる事すらできないなんて、あれが勇者なのか。いや、だが報告では、王宮にいます。第一勇者であつてもこの惨劇を、たった数分で出来るわけがない。あの男はいったい何者なんだ!!」

男が目にしたものは、たった一人の男に蹂躪される、二十万もの魔物の大群だった。大地を覆う程の魔物はすでになく、あるのは、砕け散った肉片と、光の雨による大地のクレーターだけだった。それを為した男は魔物を殲滅した後、すぐにどこかに飛んで行った。

「と、とにかく、この事を陛下に知らせなくては。あの男は危険だ。計画の妨げになるやもしれぬ。あれだけは、必ず成功させなければ。」

「ほう、その計画とやらについて、それと、貴様の言う陛下の事を話してもらおうぞ。」

「!!」 お、お前は、なぜここにいる。」

突然の声に驚き振り返ると、そこにいたのは、先ほど、魔物の大群の殲滅をして見せた、金の鎧を纏う、金髪赤目の男だった。それだけではない。男の周りから、鎖が現れ男の体を縛った。

「ふん、貴様の事は、獣どもを殲滅する前から、見えていた。隠れていたつもりかもしれないが、この我から逃れられると思うなよ。さて、もう一度言う、計画の事、陛下の事について話してもらおう。」

「ふざけるな! 誰が貴様などに、言うものか。」

「案ずるな、我の手を煩わせることはない。貴様は勝手にしゃべる。」

金髪赤目の男は、宝物庫から、注射器のような物を取り出すと、男に注射すると、男は体の力を抜き、金髪赤目の男の質問に答え始めるのである。



野暮用を済ませてギルドに戻り、ヘレナの部屋を訪ねると、ヘレナ

がいきなり近づいてきた。

「ありがとう。やっぱり君は勇者様だよ。本当にありがとう。」

「ふ、当然だ。冒険者ランクを上げるのはどのくらいかかる。」

「そうだね、さすがに今すぐという訳にはいかないけど、今回は魔物の死骸と多くの目撃者がいるから、一週間くらいかな。」

「遅い、一週間だ。一週間で済ませろ。」

「そんな無茶な。なんでいきなり、何かあったの。」

「ああ、帝国に用が出来た。冒険者ランクが上がったら、帝国に行く。」

「て、帝国！　なんで、よりにもよって帝国に。」

「なに、少し面白い情報を聞いてな。興に乗った。」

「分かったけど、君は帰ってくるんだよね。」

「無論、この件での、報酬をすべて貰っていかないからな。」

「そういうばそうだったね。それじゃ、私は一週間でランクを上げるために頑張るから、期待しててよね。」

そういつて、ヘレナは何処かへ走っていった。さて、俺もイブの所へ戻ろうか。勝手に帝国に行く決めてしまったからな、その説明もしないよ。

「イブ、私のランクが上がれば次第、帝国へ行く。準備をしておけ。」

「え、いきなりだね。わかった。何か持ってくる物あったかな。」

「理由を聞かないのか。」

「うん、王様が話してくれるなら聞くけど、どんな理由であれ、わたしは王様について行くから。」

「ふつ、イブ、忠道、大儀である。努その在り方を損なうな。」

それから、帝国に行く理由や、目的を話し、眠り。夜が明けてからは、ギルドで依頼を受けたり、エデンをぶらついたりして、気付けば一週間が過ぎていた。

## イブの心

私は、人生で二度生まれ。最初はお母さんから生まれ、二度目は……。

物心ついたころから私に自由はなかった。奴隷として生き奴隷から解放されても王国に囚われた。

10年間過ごした場所から王都に向かう途中、外で楽しそうに遊ぶ同じくらいの子供たちを見つけた。彼らは笑いながら走り回り、転んで泣いている子供を母親が抱きしめる。私の足には鎖が繋がれていて、私にはもう抱きしめてくれるお母さんはいない。彼らと私があまりに違って羨ましくて、もしお母さんの子供じゃなかったら私も一緒に……。そんなことを考える自分が怖くて泣いた。

王都に着くとある部屋に連れて行かれそこに一人の男がいた。男は私の力を王国の為に貸してくれないか。もし、貸してくれるならお母さんの名誉を回復してあげるよ、と言った。私にはよく意味が分からなかったけど、それがお母さんの為になるのだということだけは分かった。それから私はただ王国に言われるがままに行動した。お母さんの為に。

それが永遠に続くと思っていた私をわたしに生まれ変わらせてくれた、かつこよくて、強くて、優しいわたしが大好きな人それは……。



「いい加減に起きんか！ 戯け！」

「ひゃあ！ 何々何が起こったの！」

「ようやく起きたか。この我に起こさせるとはずいぶん偉くなったな  
雑種」

「お、王様。何で王様がわたしを起こして……あ！」

「……忘れていたのか。昨日あれだけ強請っておいて」

「そ、そんなことないよ！ ちゃんと覚えてるよ！ そんな事より早く行く王様」

「はあ……。よかろう。幼童の無軌道一つ許せぬなど、器が知れると  
言うもの」

「ありがとう！ 王様！」

危ない危ない。昨日いっぱいお願いして王様と一緒にに行けること  
になったのに台無しになる所だった。今わたしと王様はエデンの中  
心にある広場に向かっていている途中。今、広場ではあるイベントをやっ  
ていてそれに王様が出場者として参加するのだ。王様に出てもらっ  
るのは本当に大変だった。

「それでは第3回エデン美男美女コンテスト！ 開会です！」

「司会は商業ギルド受付嬢アイシャと特別ゲスト、先のスタンピード  
発生を被害を出さずに食い止めた手腕の持ち主」

「冒険者ギルド、ギルドマスターヘレナです。アイシャさん持ち上げ  
すぎですよ」

「いえいえ、魔物の死体を商業ギルドにも流してくれてギルドは今嬉  
しい悲鳴が止まりません。ヘレナさんには感謝しています」

「流石にあの量は冒険者ギルドだけでは捌けませんから、こちらも助  
かっていますよ。それより、そろそろ始めないと」

「あー！ これは失礼しました。それではこれより今大会の説明をさせ  
てもらいます」

エデン美男美女コンテストとは、その名の通りエデンの美男美女を  
決める催しで、エデンで過去2回もこの催しが開催された理由はエデ  
ンはその土地柄、粗暴な者が多く居る。少しでもその血の気を抑える  
ため、気持ちを発散させるイベントが年に何回も開催されている。こ  
の催しもその一つで徐々にエデンに女性が増えてきた為作られた。  
参加資格は美男美女である事だけ。ミスター・ミスグランプリにはエ  
デンの商業地区で1年間割引をしてもらえる。

エデンの人達には美男美女を見れるということと好評で今年もま  
た開催することとなった。

「審査は観客の中からランダムに選ばれた3人に独断と偏見で決めて  
もらいます」

「ランダムに選ばれるから不正は出来ないし。人それぞれ好みがある

から面白い結果になりそうね」

「そうなんです。それがこの大会の面白い所なんですよ。それでは最初は男性部門から行きましょう」

「ふふふ。今回の男性部門は盛り上がりそうね」

「おや？ 何か知っているようですね！ ヘレナさん教えてくれませんか？」

「それは見てのお楽しみと言いうことで……」

「ということなので早速一人目の参加者に登場してもらいます。どうぞー！」

それから次々といろんな人が出て来た。確かに、周りのお姉さんたちがかっこいいって言ってたけどやっぱり一番は王様だね。速く王様出てこないかなと思っていると……。

「女性たちのボルテージも最高潮！ 名残惜しいですが次で最後となります！ それでは、どうぞー！」

司会のお姉さんが合図を送ると、広場に作られた舞台の袖から王様が現れた。

「それでは自己紹介をお願いします！」

「我が名はギルガメッシュ。我が面貌をその目にする事が出来る栄誉に打ち震えるがよい!!」

「おお！ これはすごい自信を感じます！ それでは、質問をしていきたいと思います。参加した理由は何ですか？」

「出てほしいと言われたのだ。乗り気では無かったがな」

「乗り気では無いということはグランプリは狙ってないということですか？」

「否、乗り気ではなかったが出た以上、我が座るに相応しい椅子は頂点ただ一つ！」

「これは……凄い自信ですね。では、これからは審査員の方たちからの質問ですー！」

王様は審査員の人達から質問を受けていたがすべて堂々と返して、すぐかっこいい。次で最後だけど、どんな質問が来るのか楽しみにしている。



「付き合ってる女性もしくは理想の女性はこういった人でしょうか？」

その質問を聞いた瞬間わたしは、固まってしまった。こういう質問があるのは当然。実際、王様の前の人にも聞いていた。王様の理想の女性。すごく気になるけど今まで聞いてこなかった。どんな人かは分からない。けどわたしじゃないということはあるから。知りたい知りたくないそんな思いがわたしの中でぶつかり合ってる最中王様が答えようとしていた。

「……崇高な処女<sup>おとめ</sup>」

「えっと……容姿のことをききたいのですが」

「……豊満な女は好みではない」

「な、なるほど。ありがとうございます。それでは、男性部門はこれで終了となります。これから1時間の休憩後女性部門の審査に入ります！ ぜひお楽しみに」

最初の言葉の意味は分からなかったけど、次のは分かった。豊満な女つまり胸のおつきい人ってことだね。わたしは大きくない。これから成長するかもしれないけどお母さんも大きくなかったし多分大丈夫。希望はあるよね。すうこうなおとめ？ の意味は後で王様に聞けばいいかな。

「王様すつごくよかった！」

「……当然だ」

「あれ？ 王様元気ない？」

「!?……問題ない。我は宿に戻る」

「え！ 結果は見ないの？」

「結果など知れている。興味があるなら残るがいい。我は行く」

王様行っちゃった。元気ないみたいだったけどやっぱりコンテストに出たくなかったのかな？ 帰ったら王様にちゃんと謝らなきゃ。それから女性のコンテストが始まった。女性のコンテストは水着審査があるみたいだ。男の人達が盛り上がっていた。王様ならどんな反応するんだろう？ 女の人に鼻の下を伸ばす王様……想像できないししたくない。そんなことを考えているうちに女性部門も終わり、

グランプリの発表が始まった。

「それでは、例年以上に盛り上がりを見せた今大会！ 栄えあるグランプリの発表です！ 女性部門グランプリは……」

まずは女性部門グランプリから発表された。次はいよいよ男性部門グランプリ。

「男性部門グランプリは——エントリーナンバー6番ギルガメツシュー！」

「わああ！ 王様優勝した！ すごいすごい！」

「グランプリに選ばれたお二人には後日グランプリに選ばれた証が送られます。それでは、誠に残念ながら閉会とさせていただきます！」



「王様！ グランプリに選ばれたよ。すごい！」

「当然よ。言っただけ結果は既に知れていると」

「そういえば！ やっぱり王様はすごいなあ……」

「何を当たり前の事を言っている。それより、明日は依頼を受ける。早く寝るがいい」

「うん！ おやすみなさい王様」

こうして、わたしの王様との楽しい一日は終わりを告げる。そういえば何で王様元氣無さそうだったんだろう。

## 第二章 ポラリス帝国編 騒動の予感

ヘレナに呼ばれ、ギルドに向かうとヘレナからランクを上げることが出来たと言われた。

「いや、苦勞したけど何とか本部を認められることが出来た。これを受け取ってくれ。Aランクの証だ」

「これで準備は整った、明日の早朝エデンを発つ。世話になったなへレナ」

「……いや構わないさ。君にはこの都市を救ってもらったんだからな……」

ヘレナが寂しそうな顔をしながらそう言った。もし俺たちと別れることを寂しがってくれたなら、嬉しいことはない。

「……では、我は行くぞ」

「ああ……、明日は予定があつてな、見送りが出来そうにない。だからここで言っておこう。ありがとう、また……会おう」

「無論だ、帝国での用が済んだらエデンへ寄ろう」

俺はギルドを後にした。明日の出発に備えて準備はしていた、後は明日になるのを待つだけだ。

夜が明けて、俺たちは北門の前にいた。

「王様、楽しみだね！」

「帝国ではやることがある。余り遊ぶ時間はないと思うが……」

「王様と一緒にならどんなことでも楽しいよ！」

「そうか？ ならばよい」

イブと話していると、衛兵が門を開ける時間になったと言いに来た。

「では行くぞ。ポラリス帝国へ！」

「うん！」



ミーティア王国の王宮は、いつもより慌ただしかった。その理由を語るには時間をギルガメッシュがエデンに着いた時まで遡る。

いつも通りの王宮。しかし、王の部屋から男の声が突如響き渡る。

「ならん!!」

「しかし、お父様!このままでは、この国は……」

「だからこそ、代わりとなる者を探しておるのだ!」

「本当にいるのですか? 居たとして、いつ見つかるのですか?今は一刻を争う状況なんですよ」

「……一人いたのだ。」

「一人いたからと言って、もう一人いるとは限らないでしょう。いるかどうかも分からない者を探すより、為すべき事があるでしょう」

「……。」

「お父様!」

「……分かった。認めよう、レイシア、お前が勇者を召喚するのだ」

「! ありがとうございます。必ずやこの大役果たして見せます。お父様いえ、国王陛下」

レイシアは部屋を出ると、外で待機していた女騎士に声をかける。長い廊下を歩きながら、二人は話す。

「終わったわ。行きましょう、セシリア」

「はッ、陛下との話し合いはうまく行ったようですね、姫」

「……よく分かったわね」

「姫は感情が顔によく表れます」

「お兄様も同じような事を言っていたわ、私はそんなつもりは無いのだけれど。……そんな事より明日勇者様をお呼びします。貴方にも付き添いをお願いしたいのです」

「畏まりました。ですが、姫自ら召喚しなくてはならないとは……」

「いいのです。そもそも国の問題を別の世界の人に解決してもらおうのですから、この程度は当然ではないのですか?」

「それは確かにそうですが……」

「もう結論の出た話をいまさら言っても仕方ないですよ。私は明日勇

者様をお呼びします」

「畏まりました、姫」

そして、勇者召喚当日。アリシア聖堂に眩い光と共に一人の少女が召喚された。

「初めまして、勇者様。私はミーティア王国の第一王女レイシアと申します。勇者様、世界をお救い下さい」



日が沈み動物たちも寝静まる時間。森の中に水面に月や星々が浮かぶ湖がある。そこに一人の女が息を切らしながらやってきた。平時なら目を奪われたであろう景色にも目を向けずじつと森のほうを見る。やがて、森の中から複数の男たちが現れた。

「もう逃げ場はないですよ。大人しくしてくればこちらとしても手荒な真似は致しません。共に城に戻りましょう……姫」

「断る！ 父を操り国を崩壊させる者たちの下に誰が戻るものか！……オスマン、貴様騎士を謳いながら主君に剣を向けるとは、恥を知れ！」

「勘違いをしているようです。私は一度たりとも主君に剣など向けておりません。なぜなら、あなた方を主君と思ったことは一度もありませんから」

「オスマン！」

「戯れはここまでとしましょう。後ろが湖ではこれまでの様に逃げられませんよ。……やれ」

オスマンと呼ばれる男が部下の男たちに命令を出し、男たちは腰の剣を抜き女を囲み、徐々に範囲を狭め女を追い詰める。

姫と呼ばれた女は腰の剣に手を置きながら、少しずつ後ろに下がり足が湖に着いた時——剣を抜き湖に刺しながら眩いた。

「エック・テムシオン」

剣が赤く光つたと同時に当たりは蒸気に包まれ視界が悪くなった。

蒸気の中からは男の悲鳴が聞こえてきた。  
蒸気が消えると姫の姿はどこにもなかった。



「はあ、はあ……逃げ切れたか。……父上、必ずや助けて見せます」  
湖から離れた場所にあった岩に背を預け、震えた体を抱きしめながら息を整えていると……

「なかなかの余興であった。特にその剣……魔剣の類か？　なんにせよコレクターの血が騒ぐ」

女は岩から離れ、声がした岩の上を見る。

「!？」

「ん？　どうした女、まるで鳩が豆鉄砲を食ったような顔をして」

「お、おまお前、何故服を着ていない！」

「……ああ、これか。あれを見ろ」

全裸の男が示した場所を見ると、そこには湯気を出す水があつた。

「風呂か？」

「そうだ。風呂に入り旅の疲れを癒した後、岩の上で涼んでいた。そこに貴様が近づいてきたのだ」

「な、なるほど？　全裸の理由は分かった。……いつまで全裸でいるつもりだ。早く服を着ろ」

「なんだ、頬を赤らめて照れているのか？」

「てっ照れてなどいない！」

「照れるのも無理はない。我が裸身はこの世で最高水準のダイヤに勝る。それが生娘なら尚の事だろうよ。」

男の言う通り、その裸身は一種の芸術のようだった。体の筋肉は付き過ぎず、かといって少なすぎない程よい肉付きと完璧と言って言い尽くせない程の完成度を誇るその美貌とが合わさり、見るものを人体の黄金比はこれなのだと思わせるほどその裸身は美しかった。

「……照れていないと言っていい！　いいから早く服を着ろ」

「そうは言うが先ほどからずっと我を見つめているではないか。頬を

赤らめて照れていないのなら、我が裸身に興奮でもしたか？」

「誰のせいでこうなってると思ってる！」

「さあな、私のせいではないのは確かだ」

「お前のせいだ！」

「ふははは！ 貴様には道化の才があるな。どうだ、私の道化とならんか？」

「ふざけるな！ お前の道化などだれがなるか！」

「震えは止まったな」

「え……！」

女は男の言葉を聞き、先ほどまで震えていた自分の手を見ると震えは止まっていた。まさか、私の気を紛らわす為にわざと怒らせたのか。と女は思った。この事を確かめるかどうか、服を着ている途中の男を見ながら迷っていたら、少女の声が聞こえた。

「王様？ どこですか？」

「イブか、どうした？」

「目が覚めたら王様が居なくて……そこにいるお姉さんはだれ？」

「私の道化だ」

「だから違うと言って……」

女は喋るのをやめてくしゃみをした。

「お姉さんびしょ濡れだよ。どうしたの？」

「……少し湖で泳いでいたんだ」

「こんな時間に？ ……それよりこのままだと風邪ひいちゃうよ」

女が話し難そうな顔を見ると少女はそれを察したのか話を変えた。

「そうだな、道化が風邪とは面倒だ。風呂に入り、体を温めるがよい」  
「いや、だから道化じゃないと……」

「……お姉さんが今どういう状況下は分からないけど、大丈夫。王様がきつと何とかしてくれるから。だから今は体を休めたほうがいいよ」

少女は微笑みながらそう言った。

「……分かった」

「王様、お姉さんが着れる服持ってる？」

「当然だ。我が蔵に不可能はない」

「それじゃ、わたしたちあっち行ってるからゆつくり温まってね」

男はどこからか出した服を置いて、男は少女と一緒に拠点に戻っていった。



## 第一皇女

久しぶりの露天風呂にテンションが上がり、裸で涼んでいたら美人のお姉さんに裸を見られた……。そんな事より彼女について考えよう。風呂に入りながら遠見のレンズで夜空を見ようとしたら、偶然彼女が男たちに追われている彼女を見つけた。助けに行こうかと思っただが自力で逃げられそうだったので関わらないことにした。

まさか、逃げる方向が俺たちがいる方とは思わなかった。彼女が何者で一体なぜ追われていたのか。聞きたいことはたくさんあるが、とりあえず名前が先かな。

◇◇

「ふう」

私はお湯の温かさに声を漏らしながら、これからの事を考える。先ほどはあの変態男のせいで思考がパニックを起こしていたが風呂に入り落ち着きあの男のおかしな点に気づいた。あいつは『なかなかの余興であった。特にその剣……魔剣の類か?』と言っていた。何故私の剣が魔剣と気付いたのか、私とオスマンとのやり取りを見ていたのか、それとも……。

「……とりあえず、あの男の名前を聞いてみるか」

◇◇

「借りといてなんだが、服は本当にこれしかなかったのか?」

彼女は俺たちの所へ来ると、俺にそう聞いてきた。

「何だ、我の選んだものが不服と申すか?」

「いや……そうではない、服を貸してくれたことには感謝している。少女の言う通りあのままでは体調を崩していたかもしれないからな」

「それ以外貴様が着れる服はない。不服が無いと言うなら着ておけ」

「……そうだな」

そういいながら、彼女は頬を赤らめていた。それが、風呂上がりだからか服のせいかは分からない。それほど露出が多い服ではないと思うけど。

「それより、先ほどの少女は何処に行ったのだ？」

「イブなら既に寝ている。……我に聞きたい事があるのだろうか？」

「……いいのか？」

「許す。申してみよ」

「では、まずは自己紹介をしよう。お互い名前を知らないと言うのはなんだろう」

「よかろう、我はギルガメッシュ。冒険者をしている」

「ギルガメッシュ、聞かない名だな。冒険者ランクはどの位なんだ？」

「Aだが」

「！ Aランクの冒険者を知らないなんて事はないはずだが」

「Aランクになったのはつい最近の事だからな、だからだろうよ」

「最近と言ってもAランクになる程の力を持った者の名前を全く知らないなんて事早々ないはずだが……。いや、今はいいか。すまない、私ばかり質問をしまつて。私の名前はレティシア、私は……。」「迂遠なのは好きではない。単刀直入に聞こう、何故男たちに追われていた、あの男たちは何者だ。貴様が何者であるかにも関係しているのだろうか？」

俺が問い詰めるとレティシアは観念したようにこれまでの経緯を話し出した。

「私はレティシア・ポラリス。ポラリス帝国の第一皇女だ」

「最も皇女と言っても私はお飾りのような物だ。ダンスやドレスなどと言ったものにトンと興味が無くてな。代わりに私が興味を持ったものは剣や戦いだった」

およそ皇女に相応しくないものに興味を持った彼女を周りは何とかしようとしたがレティシアは聞かず、レティシアは仕えている騎士たちに無理を言い剣術を習った。レティシアには剣の才能があったらしくどんどん強くなりすぐに騎士を倒せるまでに成長した。そんな時だレティシアの妹が才覚を現したのは。

「妹はとても優秀だった。皇女とはかくあるべきと皆が思った。それから、私に皇女らしくしろと言う者はいなくなつた」

レティシアはこれ幸いと城の外に出たそうだ。身分を隠し、冒険者となり魔物と戦つたりしたらしい。

「楽しかった！　こんなに楽しいことがあるのかと思つた。私はあまり城に帰らなくなつた。小言を言うものが居なくても、私と妹を比べ剣を振るう私の事を白い目で見る者もいたからな……」

だからだろうか。レティシアが城の異変に気付いたのは数週間前だつたという。

「父がいきなり帝国の属国の国に攻め入つたと知らせが届いた。父は皇帝として必要な非情な決断を下す人だつたが意味もなくする人ではない。何か理由があるのだと、父に聞こうと城に戻ると父はもはや私の知る父ではなかつた」

皇帝は頬がこけ、足はやせ細り、もはや一人では立てない程に弱り切っていたそうだ。

「私が父の豹変ぶりに驚いていると一人の兵が襲い掛かつて来た。私はとつさに剣を抜き兵を切つた。その時近衛騎士団の団長であるオスマンは『姫がご乱心なされた……陛下をお守りしろ！』『素晴らしい、私に剣を向けてきた。その声を聴いた兵たちも最初は戸惑っていたが事実兵は私によつて切られていた。弁解の余地はなかつた、私は何とか城を出たがオスマンたちが追つてきた」

そこを俺が見たと。  
「話を聞けばオスマンとやらの反乱に見えるが……腑に落ちん顔だな」

「確かに、そう考えるのが自然だが……どうも違和感があるのだ」  
「違和感だと？」

「オスマンは昔誰かに仕えるのが幸せだと言っていた。あの顔は嘘を言っている顔には見えなかつた。それに……」

「何だ？」

「私を追っているとき、本気で追っているようには思えなかつた。私が捕まりそうになると話しかけてきて逃げる隙を晒す。一度ならま

だしも二度も同じミスをする男ではない」

確かに、俺はレティシアが逃げられるように後を追うオスマンたちを足止めしようとしたがオスマンは部下に命令し早々に立ち去って行った。

「では、黒幕は他にいる、レティシアはそう考えるのだな」

「ああ、オスマンが関わっている事に疑いはない。しかし、裏で糸を引いているものが必ずいると私は思う」

「それで、何故それを我に話す？」

「お前が聞いてきたんだろうが！」

「静かにしろ、イブが起きる」

「……はあ、何が言いたいんだ」

「いくら我が聞いたからと言って、正直に話す必要はない。何故我に真実を語った」

「それは……」

「我に何を望む？ 道化」

「！……私は今帝国中に犯罪者として、知れ渡っている。オスマンたちの計画を止めるために、場合によっては」

帝国そのものを相手に戦わなければならない。今は少しでも仲間が欲しい。ギルガメツシュ、私に力を貸してくれないか！」

「会ったばかり、素性も知れぬこの我に力を貸せと？」

「だからこそさだ。敵の手が何処に潜んでいるか分からない。だが、ギルガメツシュは私を知らなかった」

「貴様の事を知らないと言うだけで敵でないと。我が真実を語っていると我限らんぞ」

「いいや、私は私を信じる。ギルガメツシュは嘘をついていない」

「……では、力はどうだ。今の貴様は皇帝を狙った反逆者。場合によつては帝国そのものを相手にする必要がある」

「やもしれぬ、それだけの力を持っているとどうやって判断する？」  
「それこそ簡単だ。ギルガメツシュは最近Aランクになったと言った

な。しかし、私は知らなかった。つまり、ギルガメッシュは正規での方法でAランクになったのではなく功績によってAランクになったんじゃないか？」

「続ける」

「Aランクになる程の功績は相当のものじゃないとギルドが認めない。つまり、お前はギルドに認められるほどの功績を残した男が強く無い訳ないだろう。それとも、君は国一つに負ける程弱いのか？ それは期待外れだ」

「雑種風情が良く吠えた！ この我が国一つに負けるだと！ よからう、力を貸してやる。その言葉撤回する事になるぞ！」

「本当か、感謝する！」

「当然だ。この我が力を貸す事がどれほど栄誉な事か思い知るがよい！」

口が勝手に動き出し、力を貸すと言っている。今まで、ここまで挑発的な言葉を言われたこと無いから分からなかったが、英雄王ボデイは挑発にもものすごく弱いのでは……